

月刊 **みんぱく** 2月号

2026

特集

「天空」のドルポ

巻頭エッセイ
渡辺 一枝



あれから三十数年

わたなべ いちえ
渡辺 一枝

作家

プロフィール
1945年1月ハルビン生まれ。保育士として18年間勤めた後「自転車いっばい花かごにして」で作家デビュー。著書に「ハルビン回帰行」「時計のない保育園」「チベットを馬で行く」ほか多数。写真集に『風の馬(ルンタ)』『ツアンパで朝食を』『チベット——祈りの色相、暮らしの色彩』。絵本に「こぶたがずんずん」ほか。

子どもの頃にチベットへの憧れをたびたび口にしていたから、あだ名は「チベット」だった。そこがどんなところで、どんな人たちが住んでいるのかなど全く知らないまま、ただ「チベット」という響きに憧れていたことだった。

初めてチベットの土を踏んだのは一九八七年、四二歳の時だった。自分で計画しての旅行ではなく、たまたまの偶然が重なって一八年間働いた保育士の仕事を辞めた翌日の出発だった。旅行会社主催の「チベットの仏教寺院を訪ねる旅」というツアーで、同行者のほとんどが僧籍にある方達だった。

ラサに着くと当然のことながらお寺巡りとなった。懐中電灯を点けなければ足元も覚束ない寺院の中で、同行者たちは壁面の仏画に光をあてて「ナントカの間だ」「いや違うカントカだ」などと興奮気味に言い合っていた。いずれも仏様の固有名詞を言い合っているのだが、仏教に興味のなかった私には、ナントカもカントカもチンブンカンブン。仏教寺院を巡るのは、ちっとも面白くなかった。

寺院内の仏像や仏画よりも、外にいて参詣のチベット人とふれあう方が興味深かった。昼食後の休憩時間に散歩に出ると、畑では十数人のチベット人

が畑仕事をしていた。飾り付けたヤクに犁を引かせ、自分たちも鋤を振るって、種まきの準備をしていた。楽しい作業風景に私も仲間に入りたくなり、身振り手振りで気持ちを伝え仲間に入れてもらった。休憩時間には車座になってバター茶を飲み、チベット語と日本語でのおしゃべりは通じたかどうかは別として、楽しく笑いが絶えなかった。心の底から楽しくて、「素」のままにいる私を感じた。

チベット人と居るときにはすっかり寛いで、素のままの私でいられる訳を知りたくて、チベットに通う様になった。通ううちに気付いたのが、チベット人気質は、仏教に根ざしているということだった。そう気付いたら仏教に興味がないなどとは言えなくなった。

チベットには諺がとて多いし、彼らの会話を聞いていると比喩や隠喩が頻繁に出てくる。諺や会話の中にもチベット人らしさが濃く表れる。例えばこんな諺。「気が合わない結婚なら別れたらいい。治らない病気なら死ねばいい。」

チベットは、三〇年前とは町の風景も人口構成も大きく変わった。どうかチベット人らしさを失わず、チベット語を語り継いでいって欲しいと願うばかりだ。

月刊 みんぱく

2026年 2月号

表紙

五穀豊穡と村の平和を祈って男たちが弓矢の腕を競う(ネパール・ドルポ部・サルダン村、標高約4,080メートル、2019年12月、稲葉香撮影)

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 1 巻頭エッセイ
あれから三十数年
渡辺 一枝

特集「天空」のドルポ
- 2 秘境ヒマラヤのいま
南 真木人
- 4 大地と身体が響きあう
稲葉 香
- 6 多言語な「世界の屋根」
本田 伊早夫
- 6 祈る人びと
奥山 直司
- 8 幻のユキヒョウと出逢う
田中 香帆
- 10 稲葉香のドルポ名所・名物案内
稲葉 香
- 12 みんなく回覧板
- 14 押しコシ図鑑
道中に神の加護を
古沢 ゆりあ
- 16 もっと、みんなく
データベースは幸福のために
石山 俊
- 17 世界の「乗っちゃえ!」
トラックは、なんとしてでもホニアラへ
藤井 真一
- 18 だって調査だもの
まさかの相部屋
大道 晴香
- 20 ぼくっ!とフィルめし
ムフのあるとき、ないとき
市野 進一郎
- 21 今月号の地図・編集後記

天空のドルポ

秘境ヒマラヤのいま

みなみ まさき
南真木人 民博教授



企画展
ドルポ——西ネパール高地のチベット世界
会期：2026年3月12日(木)～6月16日(火)
場所：国立民族学博物館 本館2階企画展示場



ヒマラヤ「最奥」の地

ドルポとは、西ネパールのカルナリ州ドルパ郡の北に広がる高地の地名である。かつてはトルポともよばれ、一九〇〇年にここを通過してチベットへ足を踏み入れた河口慧海

(二八六六～一九四五年)が『西藏旅行記』(博文館、一九〇四年)ではじめてその名を紹介した。またドルポは、一九五八年に同地のツアルカ村で調査をした川喜田二郎氏(一九二〇～二〇〇九年)を隊長とする西北ネパール学術探検隊が、「鳥葬の国」や「秘境ヒマラヤ」と表現した土地でもある。一九五九年のチベット動乱にともないネパールとチベット(中国)の国境は閉鎖され、ここにも多くの難民が流入した。以来、外国人のドルポ入域は制限されていたが、九〇年代初めから徐々に緩和されている。

ドルポはもはや秘境ではない。鳥葬も見られない。とはいえ、トレッキング許可証費は高額で、外国人は二名以上でガイド同伴が要件とされており、おそれると行ける場所ではない。しかも最寄りの空港があるジュファールから徒歩で三日かかるリグモ(フォクスンド)湖ですら、まだ下ドルポで、より北の上ドルポに行くにはさらに四～五日を要する。そのため、今でもヒマ

秘境ヒマラヤとして知られるドルポ。ネパール北西部、「世界の屋根」のまさに一部をなすそんな高地にドルポ。たとえよばれる人びとの村がありオオムギを育て、ヤクやヤギを飼う暮らし。河口慧海が足を踏み入れて以来、探検家、宗教者を魅了してやまない。その「天空」世界とは

ラヤ「最奥」の地とよばれ続けている。チベットとネパールのあいだ

右頁：プグモ村。20世帯130人(1968年)が42世帯約240人に増加。左下に仏塔門、その上の白とえび茶色の建物がナムギャル寺院(2025年)



リグモ湖、3,612メートル。雲の先の上ドルポ方面を望む(2025年)

ヒマラヤの狭間に位置するドルポは降水量が少なく、大部分は森林限界をこえた乾いた大地である。標高約三二〇〇～四二〇〇メートルに点在する二十数村には、チベット系のドルポ。とよばれる人びとが約五一〇〇人(二〇二一年)暮らす。彼らは灌漑した畑でオオムギやソバなどを栽培し、ヤク、ヤクとウシの雑種ゾ、ヒツジ・ヤギなどの移牧をして生活する。かつてはヤクを駄獣とするチベットの塩とネパールの穀物の中継交易が重要な生業であったが、現

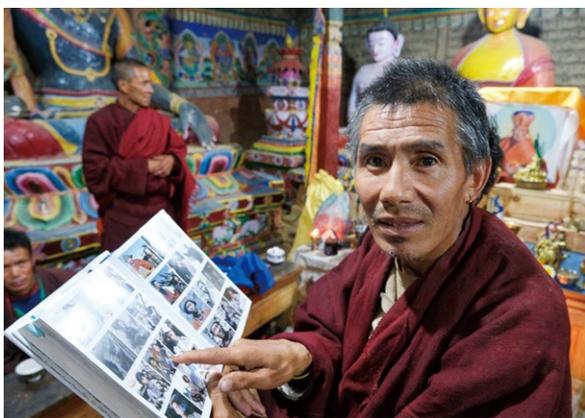
在はほぼ見られない。それに代わるようにして近年は、漢方薬になる冬虫夏草の採取と販売が大きな収入源となっている。

一九八四年、ドルポのほぼ西半分がネパールの国立公園で最大のシェー・フォクサンド国立公園に指定された。公園収益の約三割が地元で還元されているが、絶滅危惧II類のユキヒヨウとの共存という課題の克服も求められている。

五七年後のポンモ村

ドルポの人びとはチベット仏教や仏教到来以前の土着宗教であるポン教を信仰し、数多くの仏塔や僧院などの宗教施設を築いてきた。シェー山、クラー山、プグモ村のグナサといった高山の霊場も多く、巡礼が盛んだ。下界から隔絶した「天空」のドルポは、高野山のように、高地全体が聖地とよべるような独特の空間をなして、訪れる者を魅了している。

二〇二五年九月、わたしははじめて下ドルポのプグモ(ポンモ)村とリグモ湖を訪ねた。プグモは一九六八年に田村善次郎氏を隊長とする西部ネパール民族文化調査隊が調査した村で、二〇二五年一月には約半世紀を経て『ヒマラヤ旅日記——ネパールポンモ村滞在記』(八坂書房)が出版された。



『ヒマラヤ旅日記』のなかの母の写真を指さす村人。3歳のときに死別したという(プグモ村 ナムギャル寺院、2025年)

その本を村人に届け、五七年間の変容を調べるための訪問だった。着いた日には村内のポン教寺院で除災儀礼が催されており、参加者の災厄を封じたトルマ(はったい粉)とバターを捏ねて作った身代わりの造形物が僧侶によって戸外に投げ捨てられた。奇しくもその所作は、田村隊が村入りの初日に遭遇し記録したものと同じであった。同年一月、同隊の隊員であった西山昭宣氏からメールをいただいた。そこには「中継交易がなければドルポは存立が脅かされるはず。それ以外の有力な術を見つけたのか」とあった。一緒にプグモ村を訪ねることができたなら、素敵だったに違いない。



越冬拠点地のサルダン村。秋の収穫時には黄金に輝くオオムギが美しい(右:2016年9月)。冬は雪が降り積もる(左:2019年12月)同じ場所から撮影



チベット歴の祈りの日。人びとの暮らしは祈りとともにある(サルダン村、2020年1月)

大地と身体が響きあう

いなば かおり
稲葉 香 美容師、ドルポ探求家、写真家

わたしがドルポを知ったのは、二〇〇〇年に公開された映画「キヤラバン」(エリック・ヴァリ監督)である。その後、河口慧海師に導かれるようにして、慧海の旅の核心部にドルポがあると知った。二〇〇七年当時、そこは一般的には情報がほとんどなく、一部の登山家だけの世界だった。自分が足を運ぶことなど想像すらできなかった。しかし、西ネパール研究の第一人者である故大西保氏(一九四二〜二〇一四年)との出会いが、その閉ざされた扉を開いてくれた。大西氏を隊長とする「西ネパール登山隊」に参加して以来、わたしは夏と秋に東から、西から、南からアプローチを変えてドルポを四度踏破した。それで飽き足らず、二〇一九年には冬のドルポに一〇三日間滞在し、厳寒期の生活を体感し尽くした。なぜこれほど魅了されるのか。一言で言えば、「魂が震える」からである。祈りが日常に根差している村の暮らしは、

本来の生き物の原点を示していた。整った医療機関もなく、限られた資源のなかで生きる人びとの力に、人間本来の強さを見た。また美容師として外側の美を追求してきたわたしにとって、ドルポの女性たちの内側から湧き出る美しさに惚れ込んだ。その輝きは飾らずとも美しさをもっている。その美しさは強さにもつながり眩しいほどである。

現地の人々の生き方は「自然と共にある」のではなく「自然そのもの」として存在していた。それは生き物としての循環であった。月や太陽と本能で世界とつながる感覚である。ひとと冬を過ごしたわたしは自分が「獣」になった瞬間を感じた。

わたしはドルポの大地を歩くことにより、理屈を超えた感覚で結びついていった、自らの体の循環を感じるのである。呼吸をすることでエネルギーを取り入れ、歩くことで鼓動を感じ、それらがわたしの身体と響きあうのである。わたしは長年リウマチという病気を抱えているが、何故かドルポの大地を歩くと調子が良くなるのである。それはことばではなかなか表現できないが、わたしの身体はすべてを感じ取っている。ふたつは間違いなく共鳴している。そう、ドルポの大地は生きているのである。

特集 「天空」のドルポ



村の幼い修行僧と一緒に雪かきをする筆者(左)(テーカン村、2019年1月)



ヤクのキャラバン。上ドルポから下ドルポへ移動途上で見られた(バルブン川、2016年10月)



ドルポの極寒の冬では、晴れた日は家のなかにいるよりも外に出るほうが暖かい。村人はこぞって外で過ごす。男性は手元に酒、女性は糸紡ぎ(サルダン村、2019年12月)



右: 野外で織機の経糸を張る(ニサル村、2020年1月)

多言語な「世界の屋根」

ほんだ いさお
本田 伊早夫 言語学者 元名古屋短期大学教授

ドルポを含めネパール北部の山岳地方では広く「チベット語」が話されている。それぞれの地域の言語にはさまざまな違いはあるが、いずれもチベットのラサなどで話されている中央チベット語に近いものである。ドルポのチベット語はまだ包括的な辞書や文法書がなく、さらなる調査・研究が待たれている。

これら標高三〇〇〇メートルを超える山岳地帯から南に下つてくると、同じくチベット語に属するがチベット語とは別の諸言語が話されている地域が広がってくる。ドルポがあるドルパ郡では、郡の東側を南北に流れるタラップ川がバルブン川と合流する標高二五〇〇メートル付近にティチュロンという地域があり、チベット語ティチュロン方言とカイケ語という言語が話されている。カイケ語もチベット語にもルマ語派に属し、系統的にチベット語とも

近いが、日本にも大勢いるタマンやグルン、タカリの人たちが話す言語により近いと考えられている。

この地域で興味深いのが、両言語の話者のあいだの婚姻が極めて一般的であることだ。そのため、両方の言語を母語並みに使いこなす人が多く、言語間の相互の影響が語彙や音声面で顕著である。

ネパールを訪れる機会があったら、こうした少数民族の人たちとも交流し彼らの言語や文化について質問してみたりすると、旅がより豊かで実りあるものになるのではないだろうか。



ティチュロン地域とシェー山周辺の概略図

特集 天空のドルポ

祈る人びと

おくやま なおし
奥山直司 高野山大学名誉教授

ドルポの人びとは、ヒマラヤ最奥の地でチベットの伝統文化を保持してきた。彼らの精神生活の中心には、むかしも今もチベット仏教、あるいはボン教（仏教伝来以前に遡るチベットの民族宗教）がある。

人びとは、農業や牧畜、冬虫夏草採りなどのかたわら、家屋や峠の積石塚などに祈禱旗を掲げ、杜松の枝葉を焚いて仏菩薩やその土地の精霊たちを供養する。観音の真言「オン、マニ、ペメ、フーン」を唱えながら携帯用のマニ車を回し、数珠を爪繰り、僧院に参詣して仏前に五体投地をおこなう。ときには遠くまで聖地巡礼の旅に出る。

この信心深い人びとを導くのは、僧侶、特にラマ（上人）とよばれる高僧たちである。ラマのなかには過去の聖者の生まれ変わりとされる者もいる。仏教の教えは広く深い。それを民衆にわかりやすく伝えるのがラマの大切な役割である。古来ドルポは優れたラマたちを輩出してきた。

シェー（水壘）山はドルポ最大の霊場である。一三世紀に行者センゲ・イエシェーによって開かれたこの山は、西チベットの聖山カイラス（カン・リンポチエ）の兄弟ともみなされる。

この山はまたドウクダ（龍の咆哮）の異名をもち、龍と関係づけられる。ここでは一二年に一度、辰年に大祭がおこなわれ、ドルポ内外から多数の巡礼者が集まる。彼らは、僧侶たちが演ずるチャム（仮面舞踊）



シェー大祭でチャムが演じられている。背後に見える建物群はスムド僧院(2012年8月)



シェー山麓のスムド僧院の堂内。巡礼者が五体投地をしている(2012年9月)



右頁：シェー山の巡礼路のなかでもっとも高い峠(5,343メートル)に巡礼者たちが集まっている(2012年8月)
(写真はすべて稲葉香撮影)

などの出し物に興じ、シェー山の巡礼路を周回する。
ドルポの人びとの人生は輪廻転生のなかにある。今生において功德を積み、来世の幸せのため、生きとし生けるものたちのために祈る。

幻のユキヒョウと出逢う

田中 香帆

京都大学大学院博士過程（五年一貫制）

猛スピードの白い物体

それは一瞬の出来事だった。標高四二〇〇メートル地点、朝七時半から馬に乗って

すでに二時間が経ったときであった。ネパール西北部のドルポに位置するリグモ村から、ある放牧地へガイドさんとその弟さん、馬三頭で向かっていた。夏季に放牧地



Tsewang Tso

崖を駆け上っていくユキヒョウ（リグモ村近郊、2025年7月、Tsewang Gurung 氏撮影）



ユキヒョウを見た直後に訪れたバージンレイク。地域住民はチベット語で“Tsoikiya”とよんでいた（リグモ村近郊、2025年7月）

に滞在する地域住民の家畜管理方法を調査するためである。

英語で「バージンレイク」ともよばれる、数少ない人しか訪れることのない氷河湖を指している最中にそれは起こった。馬に乗って斜面を登っているとき、ふと右後ろ斜めを振り返ると、約一〇メートル下の斜面を猛スピードで横切る白い物体を見た。

ユキヒョウだった。希少種であるユキヒョウを野生の姿で見るなど夢のまた

夢だったので、理解が追い付かなかった。ユキヒョウは瞬く間に数百メートル離れた崖を駆け上っていった。このときまだわたししか気づいてなかったため、興奮した声でガイドさんに「Snow leopard! Snow leopard!」と叫んだ。彼もユキヒョウの姿に気づくと、同様に驚きを示した。彼はすぐに馬から降りて、足場の悪い斜面をもともせず走り抜け、あつという間にユキヒョウがいる崖へ辿り着き、模様や顔まで判別できる近さで写真と動画を撮ってくれた。高地で生まれ育った彼の判断力と身体能力の高さにはただただ脱帽する。またなにより、ユキヒョウの擬態能力に圧倒された。崖に見事に同化した灰白色の体色と斑点模様で、パツと写真を見ただけでは、ユキヒョウがどこにいいのか判別しがたい。

湖に到着し、その美しさに酔いしれながらもユキヒョウを見たときの情景が何度も脳内でリピート再生され、しばらく興奮が冷めることはなかった。

家畜から、ユキヒョウ、ハゲワシへ

なぜユキヒョウと運よく出逢うことができたかは湖からの帰り道で明らかになった。斜面を下った先の谷底に、老齢牛の死骸が



リグモ村内。家が複雑に立ち並び、農耕地、森林が広がる。夏季は、家畜に農耕地を荒らされるようにするため、家畜は放牧地に移動させる（リグモ村、2025年8月）



谷底で野生動物によって捕食されていた老齢牛（リグモ村近郊、2025年7月）

あった。おそらくユキヒョウは牛を捕食中にわたしたちの気配に気づき、一時的に崖に避難したのだろう。死骸の周りにハゲワシが約一〇羽集まっていた。まさか標高四〇〇〇メートル以上の高地で食物連鎖の現場をこうして目の当たりにするとは、想像もしていなかった。地域住民が放牧していた家畜から、ユキヒョウ、ハゲワシが一本の線として繋がった。しかし、同時に家畜が被害に遭っているという、厳しい現実も確認した。

高地で暮らす地域住民にとって、家畜は移動や運搬、耕作に必要であるだけでなく、その糞は肥料や燃料となるなどさまざまな用途で人びとの生活の支えとなっている。それほど重要な家畜がユキヒョウやオオカミなどの肉食動物に襲われることは、地域住民の生活の基盤を脅かす。だが、現地に滞在すると、野生動物の存在が日常的に感じられる。このドルポでは野生動物の生息域のなかに人びとが暮らしているという印象を強く受けた。

野生動物と人、家畜の三者が共存している道はあるのだろうか。大きな問いを自分のなかに残した、一期一会の経験だった。



ドルポ最奥の村から、はためく祈り

ポ村 標高 約4,087メートル

ドルポ最西部の村。1958年の西北ネパール学術探検隊が調査した当時は人口31人で「消えゆく村」と書かれていたが、現在約80人と増えている。越冬したときに食料や燃料を準備してくれた信頼のおける僧侶がいる(2016年10月)



慧海も夢見た、祈りの風景

ニサル村 標高 約3,845メートル

山肌にへばりつくようにマルコム僧院と瞑想窟があり、その下には九連の仏塔が並びヤンツェル僧院がある。伝統と信仰が今も残る(2016年9月)



ヒツジの毛で手織りされ、厚手で暖かく、落ち着いた色合いと自然素材の風合いを生かした素朴な美しさが特徴。冬の手仕事、親から子へと受け継がれている(ニサル村、2020年1月)。右の写真は尻あて(メティ)(個人蔵)



どんな防寒具より暖かい織物

特集「**天空**」のドルポ



天空の聖域

シェー山

ドルポ最大の聖山。行者センゲ・イエシェーが空中から突き通した孔(あな)があり、奇岩のあいだを約20キロメートルの巡礼路が巡る。「龍の咆哮する水晶山」とよばれる(2016年9月)



村人たちが旅する聖地

シェー・ゴンパ

シェー山には、スモド、ツァカン、ゴモチェという3つの僧院(ゴンパ)がある。これらを合わせてシェー・ゴンパとよばれる。写真はスモド僧院(2012年8月)



チベット国境近くから望む

カンジェラルワ山 標高 約6,612メートル

ブグモの人はカンチェラルバとよぶ。ラルバは「油で固まった髪の毛」の意味で、ヒマヤヒダの筋をそう見立てた(チベット国境近辺 ムシ川沿い、2019年12月)



涙のターコイズブルー

リグモ(フォクスンド)湖 標高 約3,612メートル

ターコイズブルーの水面が神秘的。伝説では魔女の涙とされ、湖畔にボン教のバル・シェンテン・タサン・ツォリン僧院がある(2012年8月)



いなば かのり 稲葉香の ドルポ名所・名物案内

写真・解説 稲葉 香



カラダ温まる
バター茶

煮出した茶にヤクのバターと塩を加えて攪拌する、高地で体を温め力を与えるチベットの伝統茶。越冬中、体が欲するようになった(サルダン村、2019年12月)



「極楽世界の百味」のうまさ
ツァンパ

炒ったオオムギの粉をバター茶で練ったチベットの主食で、日本のはったい粉に似た保存性と栄養価に優れた食べ物。越冬中、日々のおやつにしていた(テーカン村、2020年2月)

いざ、ドルポの内部へ踏み込む

ツァルカ村 標高 約4,020メートル

1958年西北ネパール学術探検隊が長期調査の拠点とした村。ドルポへ入る東側の玄関口にある城砦のような村。対岸にあるボン教僧院で祈りは今も続く(ツァルカ村、2016年9月)



みんなぱく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなぱくウェブサイト
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、
詳しくはウェブサイトを見てください。

特別展

シルクロードの商人語り — サマルカンドの遺跡と ユーラシア交流 —



ウズベキスタンから借用する展示資料が出土したカフィル・カラ遺跡(日本・ウズベキスタン共同調査隊提供)

「商人(あきんど)」の活動に焦点を当てながらシルクロードを行き交った文物を展示することで、過去から現在に至るまでの中央アジアにおける文化の多様性や、広範な交流・交易の実態を紹介します。
会期 3月19日(水)～6月2日(火)
会場 特別展示館

関連イベント

研究公演 シルクロードの音色

中央アジアの楽器と伝統音楽
本研究公演は、中央アジアの歴史の中で生み出された音楽とくにウズベキスタンとカザフスタンの伝統音楽を中心に紹介します。伝統音楽の演奏とともに、シルクロードを通じて各地に広がった楽器の解説も交えながら、中央アジアの伝統的な音楽を広く知っていただくとともに、特別展へのいっそうの理解を深める機会としていただきたいと思います。



日時 3月28日(土)13時30分～16時
(12時30分開演)
会場 みんなぱくインテリジェントホール(講堂)
定員 400名

みんなぱくゼミナール

会場 ①本館2階第5セミナー室ほか
②オンライン(ライブ配信)
参加無料
①会場参加は申込不要(定員200名)
※メイン会場(85名)が満席の場合は中継会場をご案内します(115名)
②オンラインは事前申込制(定員なし)

第565回

2月21日(土)13時30分～15時(開場13時)
「ユーラシア人」と呼ばれた人びと
— アジアの植民地支配と「混血」民族
講師 松尾瑞穂(本館 教授)

第566回

3月21日(土)13時30分～15時(開場13時)
ドルポに魅せられて
講師 稲葉香(美容師・ドルポ探求家・写真家)、南真木人(本館 教授)

「2020年植村直己冒険賞」を受賞した稲葉香は、2007年から西ネパール高地ドルポの隅ずみを歩いてきました。ドルポの魅力とは何か、その研究史をたどり、そこに住む人びとのくらしや生き方をとおして考えます。



冬の巡礼(2019年、稲葉香撮影)

みんなぱくウィークエンド・サロン — 研究者と話そう

※定員なし(着席40、立ち見可)
※申込不要、要展示観覧券(一般780円、特別展をご覧になる場合は一般1200円)
※イベント参加費は不要

3月22日(日)14時30分～15時 シルクロードの商人 ソグド人の信仰と宗教

話者 寺村裕史(本館 准教授)
会場 本館展示場(ナビひろば)

ウズベキスタンのカフィル・カラ遺跡から発見された、女神ナナを中心に供物を捧げる人びとや音楽隊が描かれた木彫板を、特別展にて展示予定です。この資料は、6～8世紀ごろのソグド人の文化や宗教観を今に伝える貴重な遺物です。その歴史的背景や芸術的価値についてご紹介します。



出土直後の女神ナナの頭部
(日本・ウズベキスタン共同調査隊提供)

3月29日(日)14時30分～15時30分 ネパール探究(探求+研究) — 女性たちのフィールドワーク

話者 稲葉香(美容師・ドルポ探求家・写真家)、工藤さくら(本館 特任助教・人文知コミュニケーション)

会場 本館展示場(ナビひろば)
ネパールを旅する「探求家」と調査する「研究者」——ネパールというフィールドで何を目にして、どのようなことを感じているのでしょうか。ともに女性であるそれぞれの視点から、そこに住む人びとの暮らしやフィールドワークについて考えます。



女性の機織り(2019年、稲葉香撮影)

本の紹介

山本紀夫 編著
『民族植物学入門
— アンデスからヒマラヤへ』

京都大学学術出版会 7,920円(税込)

標高約4000メートルの高地で栄えたアンデス文明。それを支えた人びとは何を食べ、どのように生活を築いたのか? 自然と共生する人類の知恵をひもとく、農耕文化と文明形成の普遍性と独自性を浮かび上がらせる決定版です。



友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates



友の会講演会

参加形式:会場もしくはオンライン配信
友の会会員:無料
一般(会場参加のみ):500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第569回 2月7日(土)13時30分～15時 ミュージアムはどこへ向かうのか — 国際動向から探る、 変わりゆくミュージアムの可能性

講師 邱君妮(本館 機関研究員)
会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)
今日、博物館には多様性・公平性・アクセ

シビリティ・包摂性の視点がますます求められています。本講演では、ICOM(国際博物館会議)の動向や台湾の関連事例、高等教育やアクセシビリティ向上に向けたみんなぱくの社会連携事業を紹介いたします。国際的な潮流を踏まえ、これからの博物館の可能性をともに考えてみませんか。

第570回 3月7日(土)13時30分～15時 ルーマニア民間伝承詩における 牧人の死の受容 — 復讐の連鎖を断ち切るために

講師 新免光比呂(本館 名誉教授)
会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)
人はなぜ復讐の情念にとらわれるのでしょう。

半沢直樹の倍返しに快感を得る私たち。しかし、復讐は復讐を呼び、無限の連鎖が生じます。ルーマニアで愛されてきた民間伝承詩は、復讐の連鎖を無抵抗の死とその美化によって乗り越えます。それは運命論なのか敗北主義なのか。勝つことにとらわれている現代の私たちの心性を美しいバラードによって再考してみましょ。

みんなぱく友の会 YouTubeチャンネル

一部の友の会講演会やオンラインレクチャーなどのアーカイブ動画をご覧いただけます。



企画展 ドルポ — 西ネパール高地のチベット世界



冬の法要(サルダン村 サムイエ・チョリン僧院、2019年、稲葉香撮影)

ドルポとは西ネパールのドルバ郡の北に広がる高地のことです。本企画展では、ドルポをくまなく歩いてき

出演 駒崎万集(ドクターL弦楽器、ドイラ「太鼓」奏者) イナリー・セリクバエウア(トンプラ「弦楽器奏者」) 高橋直己(カザフ民謡歌手) 寺村裕史(本館 准教授) 末森薫(本館 准教授)
参加費 要展示観覧券(一般780円、特別展をご覧になる場合は一般1200円)※イベント参加費は不要
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順
※事前申込の方へ、当日12時30分から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場していただきます。
※受付期間内に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
【申込期間】
▼友の会先行受付
2月16日(月)～20日(金)定員76名
【申し込み先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
▼一般受付 2月24日(火)～3月25日(水)

た美容師・ドルポ探求家・写真家である稲葉香の珠玉の写真と、川喜田二郎が率いた探検隊や田村善次郎が率いた調査隊が収集した民具などを展示し、ドルポの現在と変容の軌跡を探ります。
会期 3月12日(水)～6月16日(火)
会場 本館企画展示場
【関連イベント】
ワークショップ
道具から知るネパール高地の暮らし——ドルポの食文化体験
日時 3月14日(土)13時30分～15時50分
会場 企画展示場ほか
定員 10名
講師 南真木人(本館 教授)、工藤さくら(本館 特任助教・人文知コミュニケーション)、稲葉香(美容師・ドルポ探求家・写真家)
対象 小学5年生以上
参加費 500円(大学生・一般の参加者は要本館展示観覧券)
※事前申込制(抽選制)
【申込期間】
2月4日(水)10時～2月19日(木)16時
※その後抽選をおこない2月27日(金)までに連絡します。

みんなぱく映画会

「館外開催」 みんなぱく映像民族誌シアター

会場 第七藝術劇場(大阪・十三) 司会 黒田賢治(本館 准教授)
※館外での開催です。
※事前申込制(本人を含む2名まで)、先着順、参加無料
「ライジャスターンのガンゴール祭り」
日時 2月8日(日)14時30分～16時30分(14時開演)
定員 90名
解説 三尾稔(本館 教授)

みんなぱくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ

点字体験ワークショップ
日時 2月14日(土)、3月14日(土) 12時～15時30分(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付
みんなぱくの仮面で作ろう——オセアニアの仮面を作ろう
日時 3月1日(日)※1日3回開催
①11時～12時②13時～14時③14時30分～15時30分
会場 本館1階エントランスホール
定員 各回12名(先着順)
※申込不要、参加無料、当日受付

【申込期間】
▼一般受付 2月4日(水)まで
※友の会先行受付は終了しました。
社会連携ワークショップ
博物館と若者をつなぐものは何か?
— アクセシビリティから考える博物館の社会連携ワークショップ —
若者と博物館の見えない壁を探り、実践事例と対話から参画しやすい環境と連携の可能性を考えます。
日時 2月8日(日)13時～16時30分
会場 本館2階第5セミナー室
定員 50名
講師 岡田恵美(本館 准教授)、工藤さくら(本館 特任助教、人文知コミュニケーション)、邱君妮(本館 機関研究員)、西尾咲子(東京藝術大学 特任研究員)、秋本瑠理子(東京藝術大学 大学院博士後期課程)
参加費 無料
※事前申込制(申込フォームにて1回につき1名の申込が可能、先着順)
主催 国立民族学博物館博物館社会連携事業検討ワーキンググループ

道中に神の加護を

ふるさつ 古沢 ゆりあ 民博 機関研究員



ジープニー

標本番号 | H0202486
地域 | フィリピン
展示場 | 東南アジア



◆ 推しコレポイント ◆

運転席内部のフロントガラスの上のミラー部分に貼り込まれた「聖心のキリスト」の小さなカード。赤い衣と燃える心臓のキリストが、ゴシック風アーチに枠取られている。

庶民の足、ジープニー

みんぱく本館、東南アジア展示場のなかばあたりに鎮座する派手な装飾の自動車。フィリピンで親しまれる乗合自動車、ジープニーである。第二次大戦後、米軍が払い下げたジープを改造して作られはじめた。装飾は一台一台異なる。複雑に張り巡らされた路線で、街を縦横無尽に走っている。

始点と終点と経路は決まっているが、都会のごく一部を除き、決まった停留所はない。客は、走ってくるジープニーの行き先表示を見て手を挙げて停車させ、さっと乗り込む。運転手に行き先を告げ、運賃は狭い車内で客同士の手渡しで運転手まで届けられる。マニラでの初乗り料金は、現在13ペソ（約33円）程度である。客席に窓ガラスはなく、熱帯の風と道路の排気ガスが一体となった熱気が車内をとおり抜けていく。雨が降ってくると、窓にビニールのカーテンを下ろす。降りる場所が近づいたら、「パラ・ポ（止まってください）」と言うか、天井をたたいて運転手に知らせ、停車したら、さっと降りる。

車内にひそむユダ

フィリピンは、カトリックが多数派を占め、暮らしの隅々までキリスト教が浸透している。ジープニーについても、例外ではない。車体

には、さまざまな装飾が施されるが、マリアやキリストの絵もめずらしくない。キリスト教モチーフのジープニー装飾ばかりを集めた写真集が刊行されたほどである。祈りが込められた宗教美術なのか、大衆的な人気図像なのか、おそらくそのどちらでもあるのだろう。

車内に、「God knows Hudas not pay」という文言が掲示されていることがある。「who does（フー・ダズ）」と「Hudas（フダス=裏切り者のユダ）」をかけたことばである。運賃を払わないでごまかそうとする人のことを神は見ていますよ、というメッセージである。運転手や客の道中の無事を見守り、不屈き者を見張る。今日も神のまなざしのなかで、ジープニーはフィリピンの街を走り回っている。



車体にキリストとマリアの絵と「GOD IS GOOD（神様は素晴らしい）」「HOLY ROSARY（聖なるロザリオ）」の文字が書かれているジープニー（フィリピン マニラ首都圏ゲソン市、2024年）

データベースは幸福のために

いしやましゅん
石山 俊 民博 プロジェクト研究員



学術知デジタルライブラリの構築 X-DiPLAS

井上隆雄「ラダック・ビルマ仏教壁画」 写真コレクション

<https://diplas.minpaku.ac.jp/collection/mdl2021b01/>



井上隆雄のラダック

ここで紹介したいのは「井上隆雄『ラダック・ビルマ仏教壁画』写真コレクション」と名付けられた画像データベースの予想を超えた成果である。

井上隆雄氏（一九四〇〜二〇一六年）は、仏教美術や京都の文化などを題材とした多数の作品を発表してきた写真家である。写真家として独立した直後の一九七〇年代には、インド西北部ラダックとビルマ（現ミャンマー）中部のパガンを訪れ、仏教壁画や現地の様子を撮影した。井上氏の逝去後、遺された仏教壁画写真資料のデータベース化は、日本画を専門とする正垣雅子氏（京都市立芸術大学）を中心とした、諸分野の専門家による協働メンバーによってすすめられ、二〇二四年三月、

二〇六〇枚の画像の一般公開にまでたどりつくことができた。

五〇年を経て

「たどりつく」と表現したのは、多数の画像の情報入力に膨大な作業を要したからである。画像に付された情報の内容は、撮影対象物の名称、寺院名、建物名称、仏教学的および美術学的説明、キーワード、井上氏の著作でのキャプションなど多岐にわたる。全体の整合性をはかりながらこれらの情報を入力していく作業は、協働メンバーにとって過酷なものであった。

その苦行を経て構築されたデータベースの新たな価値の創出は、どのようにもたらされるのか。ひとつの試みは、データベースに収録された画像のラダックへの里帰りであった。二〇二四年の八月、ラダック仏教協会や文化遺産の保全に活躍している Arch Association との連携によって、写真のストリート展示、ギャラリー展示、トークイベントというかたちで里帰りが実現した。井上氏がラダックを訪れてから、じつに五〇年が経っていた。

ストリートで、ギャラリーで、人びとが五〇年前のラダックに没入している。画像との対話を満喫していた現地の人びとや観光客の楽しそうな表情を忘れることができない。データベースはモニターの世界を超えて、人びとを幸せにできると強く感じたのである。



写真家井上隆雄氏が1970年代にラダックで撮影した寺院の景色や祭事の写真を街角で展示。街の人びとは足を止めて思い思いに話をしていた（インド ラダック、2024年）

トラックは、なんとしてでもホニアラへ

藤井真一 民博助教

ソロモン諸島の首都ホニアラは、東西に長いガダルカナル島北岸の少し西寄りにある。そこから東へ一、二時間ほど車で行った先がわたしの長年の調査地だ。傾斜地の多いソロモン諸島の島々にしてはめずらしく、そこには大きな平原が広がっている。それほど勞せず農作物に恵まれる地域でもあり、首都への作物供給源となっている。また、この平原には三万ヘクタール以上のアブラヤシ農園があり、搾油工場と首都とはヤシ油を運ぶための舗装道路でつながっ

ている。とはいえ、周辺集落をつなぐのは基本的に未舗装の道ばかりである。そうした道は、雨が降ったらたまらない。隣の村まで歩く分には問題ないが、乗り物で遠出するとそうはいかない。乗用車はおろか大型トラックさえも雨上がりのぬかるみから抜け出せなくなってしまうことしばしばある。あるとき、約一カ月の調査を終えて首都へ戻るわたしを村の友人たちがトラックで送り届けてくれることになった。ただ、運

が悪いことに前日の大雨のせいで、ぬかるみに足を取られてさっぱり車が進まない。みんな一緒に荷台から降りて、押ししたり引いたり、さらにはヤシの葉を切ってきて道に敷いたり工夫する。悪路を抜けたのは約二〇分後、みんな泥だらけになっていた。とはいえ、一連の作業は手際よく、途中の小川で水浴びして付近の友人宅から着替えを借りてくるほど手慣れていた。

急いでいたわたしのために彼らは無理をしてぬかるみを越えてくれたのか。ところがそんなわけでもない。ぬかるみの難所を越えたあと、わたしを首都へと送る前に別の集落まで農作物やコプラ（ココナッツの胚乳を乾燥させたもの）の集荷に行ったのだ。農作物は重い。イモ類は特に重し、コプラやカカオなどは麻袋一つが一〇〇キログラム近くになることもある。それらを運ぶのにトラックは欠かせない。しかも、農作物やコプラなどを首都で売り、その収入で日用品や食糧などを手に入れる生活に村人たちはなじんでしまっているのである。あの雨上がりにわたしを首都まで送ってくれたのは、この「ついで」だったのかも知れない。



あの手この手でぬかるみからトラックを脱出させる。みんな泥だらけだ（ガダルカナル州、2018年）

まさかの相部屋

おおみち
はるか
大道 晴香 國學院大學 准教授

恐山の朝は早い

恐山は、青森県の下北半島にある本州最北の仏教霊場である。イタコの口寄せで知られ、夏と秋の祭典

時には、死者の声を求める人びとで長蛇の列ができる。そんな知名度と裏腹に、当地にやって来るイタコは二〇〇年代には三名にまで減少し、近年は一名の状況が続いている。



恐山へは麓からバスでも行けるが、本数が少ない(上:2021年、下:2025年)(写真はすべて青森県 むつ市)

四時間待ちもざらだ。だからこそ、口寄せを求め人びとは、夜も明けきらぬうちから門前に列をなし、開門を待ちわびている。その様子を研究対象としてぜひとらえたいと、朝四時半にタクシーをお願ひし、麓の宿から移動するのがわたしの常であった(運転免許はあるが、わたしの運転では自分が口寄せされる立場になってしまう)。

そんなあるとき、気がついた。開門と同時に入ったとしても、もはや結構な数のお客さんが並んでいるのだ。宿坊のお



「イタコの口寄せ」と書かれた看板(2025年)

死者の靈魂は恐山に集まるとされる。三途川の太鼓橋を渡った先は「死者の世界」となる(2023年)

客さんである。宿坊に泊まらなければ、開門前の境内の様子はわからない。側は盲点であった。

すでに予約でいっぱい

年の秋、意気込んで宿坊に連絡を入れたが、わたしは恐山を侮っていた。時すでに遅し、部屋は予約で埋まっていた。そりゃ、そうだ。ともすると、一年近く前から予約している人もいるに違いない。ましてや、繁忙期のお一人様利用。断られても仕方あるまい……。ところが、電話の向こうから

「相部屋でもよければ、用意できます」

戸惑いながらも、他に選択肢はあるまいと即決した。とはいえ、

日が近づくにつれ、不安感が増してくる。今のご時世、どこの誰かわからない人と相部屋というシチュエーションはそうない。なかなかハードルが高い。相手も気を遣うに違いない……気を揉んでいた。

同室になったのは、

岐阜県から来た二〇代の女性だった。若い女性単独だったのは意外であった。宿坊の方でもいろいろ気を遣ってくれたのだろう。とても気さくな方で、年齢が近かったこともあり、わたしは拍子抜けするくらいすぐに打ち解けて、身の上を語りあった。彼女は母親の知人に恐山の話聞いて、はるばるやって来たのだという。中学生のときに亡くなった祖父をよびたい、後悔がある、とのことだった。

供養の妨げにならない

口寄せの実相は、プライバシーの塊である。死者の語りはもちろん、依頼者に話を聞くことも相当難しい。境内では参拝者に能動的な問いかけ

2025.10.12
10月14日 2025/10/14 14:03
「私が一方的にしゃべっちゃって」
終わった後に地蔵に参拝

1453、14人待ち (椅子に皆座れている)
1545、16人待ち (同)、看板が伏されている
1555最終バスで下山

の信者の方、最近まで来ていた
今年電話があつて(さん?) お願いされて、英霊地藏尊の錫杖を新たに作った

2025.10.13
0530.開門は6時、まだ人は並んでいない
駐車場に車内で待機している人がちらほら
0532.タクシーで来た人あり、女性1人
0545.4人並びだす
0548.5人
0600.9人待ち
ユニサイト、同じくタクシー待ちの女性
夏も来て口寄せした、

フィールドノートはスマホのメモ機能を利用している

はおこなわない。とにかく参拝者の供養を妨げない、調査はこれに尽きる。筆記でメモをとる姿も浮く気がする。最近はおっぱらスマホ入力を生みづらいスタイルである。

だからこそ、宿坊で口寄せを求め理由や経緯をじっくり聞かせてもらえたのは、大変貴重で、稀有な出来事なのであった。口寄せを終えた後、感想も聞かせてもらった。すべては相部屋のおかげである。宿泊所に参拝者が雑魚寝でひしめき合った、往時の恐山が頭をかすめた。

なお、めったに来ない台風の余波で鉄道が運休し、わたしと彼女はその後、バスの旅をともにしたのだ。





ムフのあるとき、ないとき

いちの しんいちろう
市野 進一郎 民博 特任助教

早朝からワオキツネザルの観察に出るわたしの朝ごはんは、ムフである。マダガスカルフランスパンのことで、ふつうのフランスパンより柔らかめで香ばしいのですぐに食べられる。調査地の村では手に入らないので、いつも近くの町でムフを十数本買い込んでからいく。調査地では毎日、暗いうちに起き出し、お湯を沸かす。適度な大きさに切ってジャムを塗り、チーズを添えて、コーヒーか紅茶といっしょに食べる。簡素だが腹もちがよくておいしい朝ごはんである。

常温でも4、5日はもつが、徐々に乾燥してぼろぼろとした食感へと変わっていく。乾燥を防ぐためにビニール袋などに入れておくと、今度は湿気がこもりカビが生えてくる。これらを防ぐためには、毎日欠かさず袋から取り出して、適度に乾かす作業が必要となる。数が減り、おいしくもなくなってきたころに次を調達する。調査地である保護区には町から観光客を運んでくる車があり、運転手をお願いしておけばムフも運んできてくれるのだ。

観光客が少ない時期には何日も車が来ないことがある。そんなときには、村でムフガシを買う。首都では米粉で作るのだが、調査地である南部でムフガシといえば小麦粉をこねて揚げたドーナツを指し、甘くておいしい。ただ何日も続くと飽きてくるので、ムフが届くのを待ちわびながら、ムフガシを食べ続ける。

ときにはムフガシすら手に入らない緊急事態も起きる。そんなときにはワオキツネザルの観察もうまくいかない。わたしはきっぱりと調査を中断

して保護区内にある観光客向けのカフェテリアへと向かい、サンドイッチを注文する。切れ目を入れたムフにたっぷりバターが塗られ、塩とコショウで味付けしただけのオムレツが挟まれて出てくる。この単純な味が驚くほどおいしい。苦みの効いたマダガスカルのコヒーといっしょに味わうと、不思議と満ち足りた気分になり、再びやる気が出てくるのだ。



上: 路上でよくムフが売られている
(マダガスカル 中央高地、2006年、栗林愛撮影)
下: 調査地のある南部とは違い、米粉を使ったムフガシ
(マダガスカル マジュンガ、2007年、栗林愛撮影)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間と
おして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつ
くられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さ
まざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

[https://www.senri-f.or.jp/
minpaku_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)



友の会

ご寄付のお願い

みんぱくの活動をいっそう発展、充実させるため、
みなさまのご支援をたまわりますよう心よりお願い
いたします。

[https://www.minpaku.ac.jp/
aboutus/policy/kifu](https://www.minpaku.ac.jp/aboutus/policy/kifu)



寄付申込



みんぱくウェブサイト
<https://www.minpaku.ac.jp/>

今月号の地図



編集後記

3月12日、企画展「ドルポ——西ネパール高地のチベット世界」が開幕する。関連して今号の特集では、探検家たちを魅了してやまない秘境ヒマラヤのドルポにフォーカスした。

探検にはロマンがある。探検はヒロイズムである。謎めいた天空の世界について読みながら、子どものころ抱いた探検への憧れを思い出し興奮した。もちろん稲葉香さんの写真のおかげもある。息をのむほど美しい景色がそこにあり、命のたくましが写しこまれているからだ。写真もじっくりお楽しみいただきたい。

さて「世界の『乗っちゃえ!』」コーナーでは、

古沢ゆりあさんがフィリピンのジープニーを紹介。東南アジアは都市交通がおもしろい。乗合の交通機関が発達していて、運行ルート、乗り降りの方法、運賃の払い方などが、乗り物によってそれぞれ異なっているのだ。もちろん、その「庶民の足」から見える庶民の景色もおもしろい。東南アジア展示場でジープニーにタダ乗りできるので、ぜひ!

(樫永真佐夫)



次号の予告 3月号

特集「シン・シルクロード」(仮)



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151 FAX 06-6875-0401

開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)、年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 780円/大学生 340円/高校生以下 無料

特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。

※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

交通のご案内

◎みんぱくは、大阪・万博記念公園内にあります。

○大阪モノレール…「万博記念公園駅」「公園東口駅」下車徒歩約15分

○バス…阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分

○乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分



国立民族学博物館友の会機関誌

最新号「季刊民族学」195号 ISBN 978-4-915606-33-3

世界を旅し、変化しつづける
「みやげもの」のパワーに注目!

【特集】みやげもの——旅するモノがもつ力

「みやげもの」とは何か
鈴木涼太郎

「みやげもの」としてのトルコ絨毯
田村うらら

「マサイ」のビーズの首飾り
中村香子

木彫り熊とアイヌの工芸
齋藤玲子

アートのみやげものも
緒方しらべ

売らないみやげものと
割れない割り箸
門馬一平

つくられた伝統と
エスニック・アイデンティティ
雨森直也

日本人の新たな定番みやげ
台湾のバイナッブルケーキ
鈴木美香子
開発支援から生まれるみやげもの
風戸真理

「聖なる町」のみやげもの
笠井みぎわ
グローバル化するみやげもの
鈴木涼太郎

国立民族学
博物館
ミュージアム・
ショップにて
販売中

定価
2,750円(税込)

友の会会員
特別価格
2,200円(税込)

公益財団法人 千里文化財団 〒565-8511吹田市千里万博公園10-1(国立民族学博物館3階) 電話 06-6877-8893 WEBサイト <https://www.senri-f.or.jp/>

ひとりひとりのご参加が、 国立民族学博物館と友の会の活動を支えています。

国立民族学博物館友の会は、国立民族学博物館(みんぱく)の活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。21世紀は地球上のいたるところでおたがいを認めながら、ともに生きてゆく考え方が求められています。世界の暮らしの多様性にふれ、それを解き明かす文化人類学・民族学の知見がますます重要になっています。みなさまのご支援とご参加をお待ちしております。

訪れるたびに発見がある
博物館を
何度でも楽しめる

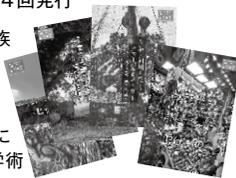
年間何度でも本館展示と特別展をお楽しみいただけます(一部の特別展は割引料金適用)。館内で開催する催しへの参加もスムーズ。研究公演など一部の催しには会員優遇枠もあります。

さらに踏み込んだ話題提供
友の会講演会 年12回開催

人びとの営みの真髄にふれる

『季刊民族学』 年4回発行

友の会の機関誌。世界の諸民族の社会や文化に関する正確な情報を平易かつ読み応えのある文章、豊富なカラー写真で紹介する、あなたの知的欲求に応える市民向けビジュアル学術誌です。



最新の情報をいち早くお届け

『月刊みんぱく』 年12回発行

「月刊みんぱく」はみんぱくの広報誌です。展示や催しの情報のほか、資料の解説や現地の様子、調査の動向を親しみやすいエッセイやコラムで紹介いたします。



お問い合わせ、お申し込みはこちら

友の会はいつでも、どなたでもご入会いただけます。

国立民族学博物館友の会

公益財団法人 千里文化財団

電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

入会方法は友の会ホームページに記載しております。

